

〔資 料〕

心理学科における卒業論文題目から見た 研究テーマの変遷

—計量テキスト分析を用いて—

岩山 孝幸・渡邊 寛

The Transition in Research Themes of Graduation Thesis Titles in the Department of Psychology —Using Quantitative Text Analysis—

IWAYAMA Takayuki and WATANABE Yutaka

We conducted a quantitative text analysis of graduation thesis titles in the Department of Psychology, Faculty of Human Sociology of the Showa Women's University, for the 23 years from 2000 to 2022, examined changes in the research themes. The results of the frequency analysis showed that research themes in the four major areas of psychology were selected in a well-balanced manner, reflecting the Curriculum Policy. In addition, the results of co-occurrence network analysis revealed a decrease in research themes focusing on the relationship itself with the surroundings, such as “interpersonal-relationships”, and a stronger tendency to focus on how one feels and perceives oneself in a relationship, such as “interpersonal-anxiety” in the same interpersonal contexts.

With quantitative text analysis, we succeeded in eliminating subjectivity and objectively understanding overall thesis themes and transitions. In general, recent students are increasingly more concerned with their own inner aspects. Considering the Diploma Policy, it seems that more research guidance is required to encourage students to be interested in others and society, not only in their own inner aspects.

Key words: *graduation thesis* (卒業論文), *graduation thesis title* (卒業論文題目), *research theme* (研究テーマ), *quantitative text analysis* (計量テキスト分析), *psychology education* (心理学教育)

はじめに

本学人間社会学部心理学科（以下、心理学科）は、2022年に記念すべき開設30周年を迎えた。1992（平成4）年、文学部に心理学科が設置され、2003（平成15）年に開設された人間社会学部に心理学科が位置づけられてから現在に至るまで、「特定分野に偏らない心理学的知識・視点と、対応する技術スキルの習得」を目的としたカリキュラム・ポリシー¹に基づき、あえてコース制を設けず、心理学の主要4領域である「認知心理学」、「発達心理学」、「社会心理学」、「臨床心理学」の基礎を学び、幅広い視点を身に着けた人材を輩出すべく教育を行っている。

心理学科では、開設30周年を期に心理学科での教育を受けて卒業した後、どのようなキャリアを

形成しているか調べるため、OGを対象としたキャリアアンケートを企画・実施した²。このキャリアアンケートは、卒業生の現在の状況を把握し、在学生在が自身のキャリア形成の参考にするとともに、心理学科におけるキャリア形成支援の参考にすることも目的としていた。一方で、心理学科の教育の集大成は「卒業論文」であることから、卒業論文を対象とした分析を行うことで心理学科における心理学教育の実態が見えてくると思われる。卒業論文を対象とする場合、卒業論文題目（以下、卒論題目）に着目した研究がいくつか見られる。

例えば、東京帝国大学国史学科における近代歴史学の変遷を調査した研究（佐藤，2021）や九州大学文学部西洋史学研究室における西洋史学教育の変遷を調査した研究（岡崎・坂本・平田，2022）などが挙げられる。これらの研究は卒論題目を年代別に整理し、当時の時代背景と照らしながら研究動向をマクロに検討したもので、キーワードレベルのミクロな分析は行われていないか、行われていても時代背景をもとに「労働」など特定のキーワードが抜粋されているに留まっている。このように卒論題目のようなテキストデータを対象とする場合、分析者の関心にに基づきデータを引用し解釈する質的方法が取られることが多い。

一方で、最近では分析ツールの発展に伴い、テキストデータであっても計量的な分析方法を用いて量的に検討することが可能となってきた。テキストデータの整理、分析に際してその内容を客観的かつ計量的に分析するものは特に「計量テキスト分析」と呼ばれる（樋口，2020；樋口・中村・周，2022）。計量テキスト分析を用いることで、分析者の主観に左右されずデータの全体像を把握したり、分析結果の客観的な説明が可能になるという利点がある。

計量テキスト分析を用いた卒論題目の研究としては、京都女子大学現代社会学部における研究（丸野，2016）が挙げられる。この研究では、2002（平成14）年度から2014（平成26）年度までの12年分の卒論題目を、年度別および学部のクラスター制³に基づき「人間・文化」「家族・地域社会」「政治・公共政策」「経済・経営」「情報・環境」の5つのクラスター別に分析している。単語の出現頻度に関して頻度分析を行った結果、クラスターごとに多様なテーマが選ばれていることに加え、東日本大震災や食品偽装問題など当時の時事問題から影響を受けた卒論題目が見られることが示されている。また、語のつながりに関してネットワーク分析を行い、4年ごとに比較した結果、「女性－就業－継続」という語のつながりが増えていることから、女性の就業問題を研究テーマに選ぶ学生が増えたことも示されている。このように、計量テキスト分析を用いることで卒論題目の変遷の全体像を客観的に把握することが可能となる。しかしながら、この研究では計量テキスト分析が行われているものの、出現頻度が少ない語も含めた分析が行われているだけでなく、「女子」「女性」など女子大学において題目に選ばれやすいキーワード⁴も除外せず分析が行われており、このような出現頻度が年代を問わず多くなりやすいキーワードに引っ張られ、それ以外のキーワードの変遷が見えにくくなっている可能性がある。

また、明星大学教育学部における研究（緒賀・桑原，2017）でも計量テキスト分析が行われており、頻出語上位9単語の1986年～2010年までの変遷が分析されている。その結果、「家庭」が2000年代に入ると大幅な減少が見られるなどの傾向を見出しているものの、語のつながりに関する分析は行われていない。したがって、例えば「家庭」がどのような文脈で使われなくなったのかまでは分からず、十分な分析が行われているとは言い難い。

以上のように、卒論題目を対象に計量テキスト分析を行うことで、学生の興味関心の変遷を分析す

ることが可能となり、心理学科における心理学教育のあり方を考える上でも有用であると思われる。なお、同じ心理学を専攻する学部あるいは学科の卒論題目を対象としたものでは、関西大学社会学部における対人社会心理学のゼミを対象とした研究（高木他，2011）がある。この研究では、1977（昭和57）年度から2009（平成21）年度にかけて、「自己」および「対人関係」が卒論題目のキーワードに選ばれやすいことが示されている。しかしながら、計量テキスト分析を行わずに題目を「援助行動」などいくつかのテーマに整理してから分析を行ったため、テーマの分類に左右された可能性がある点、および1つのゼミに限られているため、指導教員の影響の大きさが無視できない点が問題として挙げられる。

以上を踏まえて、本研究は、心理学科における卒論題目を計量テキスト分析にかけることで、可能な限り主観性を排した上で研究テーマの変遷を検討し、学生の興味関心の移り変わりを明らかにすることを目的とする⁵。研究を通じて、心理学科におけるこれまでの心理学教育の様相に加え、これからの心理学教育のあり方を考える上での知見を得られることが期待される。

方 法

対象データ

心理学科においてこれまで提出された卒業論文のうち、題目が電子データ化されている2000（平成12）年度～2022（令和4）年度の23ヵ年度分のデータを対象とした。本論文の執筆時点で題目変更届の提出期間前であった2022年度を除き、題目変更が反映された最終版のデータを用いた。副題があるものは切り分けずに1件として扱った。英題が1件あったため、内容が損なわれないように和訳し分析対象とした。共同研究で同じ題目が提出された18件を除き、最終的に1,876件が分析対象となった。なお、分析に際しては個人情報の保護のため執筆者の氏名は切り離して題目のみ匿名データとして処理した。年度別の題目数をTable 1に示す。

Table 1 卒論題目数（年度別）

| 年度 | 題目数 | 年度 | 題目数 | 年度 | 題目数 |
|------|-----|------|-----|------|-------|
| 2000 | 71 | 2010 | 67 | 2020 | 92 |
| 2001 | 61 | 2011 | 82 | 2021 | 105 |
| 2002 | 62 | 2012 | 83 | 2022 | 110 |
| 2003 | 77 | 2013 | 97 | | |
| 2004 | 71 | 2014 | 81 | | |
| 2005 | 78 | 2015 | 88 | | |
| 2006 | 73 | 2016 | 86 | | |
| 2007 | 88 | 2017 | 83 | | |
| 2008 | 71 | 2018 | 91 | | |
| 2009 | 65 | 2019 | 94 | | |
| 合計 | | | | | 1,876 |

分析方法

計量テキスト分析用のソフトウェアはフリーウェアも含めさまざまなものがあるが、本研究では、KH Coder3.Beta.03i⁶（以下、KH Coder：樋口，2020）を用いた。KH Coder は従来の計量テキスト分析の利点を統合した手法を用い、品詞ごとの語の自動抽出だけでなく、研究者の関心に沿った語のまとめ処理（コーディング）、多変量解析によるデータ要約などを備えた計量テキスト分析ソフトウェアである。KH Coder を用いた研究が国内外の学術研究雑誌に 5,651 件（2022 年 11 月現在）掲載されているなど、既に学術研究で広く用いられている分析ツールである。

KH Coder ではさまざまな分析を行うことが可能であるが、今回は研究テーマの変遷を探索的に検討するため、出現頻度の多さを調べる頻度分析および、語のつながりを調べる共起ネットワーク分析を行った。

分析ルール

語の抽出では、「きょう／だい」のように不自然に分割されるものに関しては「きょうだい」と強制抽出するよう指定を行った。また、同じように卒論題目を対象に計量テキスト分析を行った先行研究（緒賀・桑原，2017）の問題点を参考に、「影響」「関連」⁷「研究」「検討」などは出現頻度が多いものの、そのすべてが文末に限定されて用いられていたため、語のつながりを分析する上では意味をなさないと判断し抽出対象外とした。「着目」「及ぼす」「与える」も前述の文末表現に繋がる形で用いられていたため抽出対象外とした。さらに、「女子」「大（学）生」も冒頭表現として用いられていたため抽出対象外とした。これらの年代を問わず文頭、文末に選ばれやすい表現を除外することで、キーワードの変遷をよりの確に捉えることが可能になると思われる。

語と語のつながりを分析する共起ネットワーク分析では、ネットワークが煩雑になるのを防ぐために出現頻度が 30 回以上の語を対象として分析を行った。また、語のつながり（共起）の指標としては Jaccard 係数を用いた。Jaccard 係数は概ね 0.1 を超えていればある程度共起があったことを意味し、0.2 を超えていると強い共起があったと見なせる（樋口他，2022）。今回は特定の語同士が結びつきやすい専門用語を含むテキストを対象としたため、特定の語以外の指標が低くなる傾向が想定される。したがって、0.1 前後でも意味ある共起が生じたと判断した。さらに KH Coder のオプションである「共起パターンの変化を探る」を使用し、「年度」を外部変数とする語のつながりの変遷を含んだ分析を同時に行った。

結 果

頻度分析

まず、語の出現頻度を単純に集計した結果の上位 10 語を Table 2 に示す。心理学科の主要 4 領域に照らしてみると、認知心理学領域は「認知」、社会心理学領域は「対人」「関係」など関連が容易に分かる頻出語が挙げられた。

一方で、発達心理学領域と臨床心理学領域は抽出された語のみでは分かりにくいものの、「乳児」「幼児」「乳幼児」「児童」「子供（子ども）」は合わせて 82 回登場し、「自尊－感情」は「感情」全体のうち 65 回、「対人－ストレス or 不安 or 恐怖 or 依存」は「対人」全体のうち 60 回登場するなど、発達心理学領域および臨床心理学領域と関連する語も挙げられていたことが分かる。

Table 2 頻出語（上位 10 位）

| 抽出語 | 出現回数 |
|-----|------|
| 関係 | 291 |
| 自己 | 275 |
| 行動 | 217 |
| 感情 | 197 |
| 効果 | 163 |
| 認知 | 163 |
| 対人 | 155 |
| 友人 | 134 |
| 傾向 | 116 |
| 心理 | 114 |

共起ネットワーク分析

次に、語のつながりを分析するため共起ネットワーク分析を行った。また、語のつながりを含めた変遷を検討するため、「年度」を外部変数とした共起パターンの変化に関する分析も同時に行った。共起ネットワーク図⁸を Figure 1 に示す。

分析の結果、図下方の「家族」「(母)親」「養育」「態度」「青年」など、家族や親子関係、発達段

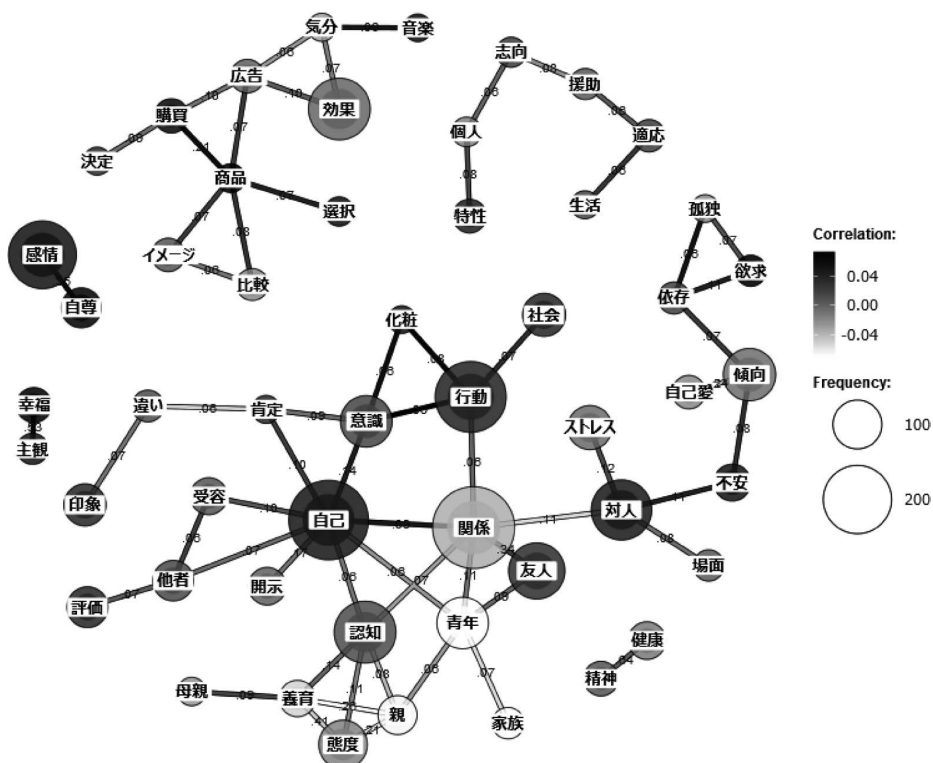


Figure 1 共起ネットワーク図
 (「年度」を外部変数とする共起パターンの変化も含む)

階に関連するキーワードは最近になるにつれ卒論題目として選ばれにくくなっている。一方で、「自己」「自己－肯定」「自尊－感情」「主観－幸福」など自己や自己の内面に焦点を当てるキーワードが選ばれやすくなっていることがうかがえる。実際、「対人」は以前では「対人－関係」のつながりで選ばれやすかったのに対して、最近では「対人－不安」と内面を表す語との結びつきが多くなっている。同様に「欲求」もより最近の卒論題目において選ばれやすくなっているが、文脈を確認すると「拒否回避－欲求」「賞賛獲得－欲求」「承認－欲求」「対人－依存－欲求」など、やはり自己の内面を表す語との結びつきが多いことがうかがえる。さらに、「商品」「購買」「選択」「決定」など消費者心理や意思決定に関するテーマのほか、「印象」や「化粧」など顔（表情）認知に関するテーマや、「音楽」も最近ではより選ばれやすくなっている。

他に、「ストレス」「精神－健康」「援助」「広告」「イメージ」「効果」などに関しては時代を問わず選ばれていることもうかがえる。

考 察

本研究の目的は、心理学科における卒論題目を計量テキスト分析にかけることで、研究テーマの変遷を検討し、学生の興味関心の移り変わりを明らかにすることであった。頻度分析の結果、心理学科のカリキュラム・ポリシーを反映し、心理学の主要4領域の研究テーマがバランスよく選ばれていることがうかがえる。また、共起ネットワーク分析から、対人関係や家族関係、親子関係などの周囲との関係性そのものを対象とした研究テーマが減り、同じ対人でも「対人－不安」のように関係性における自己の感じ方や捉え方に焦点を当てる傾向が強くなっていることがうかがえる。特に、「自尊感情」については顕著に増加傾向が見られるが、自尊感情の時代的な変化を調査した研究（小塩・脇田・岡田・並川・茂垣、2016）⁹では、新聞や書籍において「自尊感情」の出現頻度が調べられており、1980年代以降増加傾向にあることが示され、本研究の結果とも整合する。

同じ心理学科の卒論題目を対象とした研究（高木他、2011）においても、自尊感情を含む「自己」をテーマとする研究が1990年代前後から増加し、学界全体の傾向とも一致することが指摘されている。一方で、高木他（2011）の研究では、「対人関係」をテーマとする研究が2000年代前後から増加していることが示されており、一見すると本研究の結果と一致しないように思われる。しかしながら、高木他（2011）の研究では研究テーマをまとめる際に計量テキスト分析を行っておらず、「対人関係」のテーマの中に、「対人不安」も含まれている。実際、「対人関係」をテーマとする研究72編中75%にあたる54篇が「対人不安」などの臨床的関心をもつ研究であり、親密性などの関係性に焦点を当てた対人関係の形成過程を扱った研究は少なく、本研究の結果と一致する。

なお、「青年」が選ばれなくなった理由であるが、近年の就労や結婚のあり方の変化から「青年期」と「成人期」を明確に区分する基準が成り立たなくなってきたことが指摘されており（石黒、2021）、大学生が自分を位置づける枠組みとしては曖昧なため選ばれにくくなったと考えられる。また、消費者心理や意思決定、顔（表情）認知や音楽心理に関する語の増加傾向については、指導教員の入れ替わりによる影響が反映されたものと考えられる。

以上の通り、本研究は計量テキスト分析を用いることで主観性を排し、卒論題目の全体像とその変遷を客観的に把握することが可能となった。全体的な傾向としては、自らの外ではなく、自らの内面により興味関心が移っていると考えられる。

村本（2006）は従来の心理学研究を振り返る中で、“心理学が扱っている「心」とは、物質に還元できる実体ではなく、人びとが社会に生きることを通じて自己や他者のうちに抱く仮説的な概念である。…心理学の研究法のかたちは、社会から切り離された個人の内面ではなく、開かれた社会の現場に生きる人びとの相互作用に目を向けることから始まる”（村本，2006，pp. 223-224；傍点筆者）と述べ、心を社会というマクロレベルの中で捉えていく必要性を指摘している。

そもそも、科学的な心理学論文を書くためには“「私」をひとまず脇におき、客観的な目で結果をながめ、得られた知見とそこから生じた考察を書くこと”（都筑，2006，p. 224；傍点筆者）が求められる。自分が「こう感じた、こう思った」ことだけを記したのでは他者が納得する文章にはなり得ない。卒業論文の執筆をきっかけとして、ともすれば自己の内面だけで完結しがちだった関心を外に出し、調べたことを分かりやすく伝えようと工夫する作業自体こそ、他者そしてその他者が生きる社会とのつながりを意識するきっかけになり得るのではないか。研究テーマがいかに変遷しようとも、卒業論文で行われるこの営みは不変であると思われる。したがって、研究テーマが自己の内面に傾きやすい昨今においては、研究指導を通じて学生の関心を社会につなげていく重要性がより増しているとも言える。

心理学科のディプロマ・ポリシー¹⁰では、「人のこころと行動を科学的に捉える心理学のさまざまな領域を学び、社会に貢献しようとする意欲ある人を育成することを目的」とし、卒業までに備える能力として「2. 人と社会の諸問題に関心を持ち、心理学を活かしてアプローチし、その解決に貢献できる」、「5. 自己と他者の特性を理解し、自己を活かしつつ他者と協働できる」（いずれも傍点筆者）を掲げている。このディプロマ・ポリシーを鑑みても、自己の外側（社会）よりも内面への関心に傾きやすい特徴に留意し、社会とのつながりを意識した関心へと育てていくことが卒業論文指導には求められているのではないだろうか。2023年度から心理学科での学びと卒業後のキャリアとのつながりを具体的に示し、主体的な学びとキャリア形成を促すことを目的とした「キャリア準備履修プログラム」が開始されることから、今回の結果も参考にキャリアを含む社会へと学びをつなげていく今後の心理学教育のあり方を考えていく必要がある。

なお、本研究は以下の点で限界がある。まず、前述の通り電子データ化されていない1995（平成7）年から1999（平成11）年までの卒論題目は分析対象外となっている。1～4期生までの初期の卒論題目の傾向が反映されていないため、厳密には心理学科の歴史全体を反映した研究テーマの変遷とは言えない。しかしながら、初期の在籍数は今よりも少なくデータが追加されたことで結果が大きく変わることはないと考えられる。

また、一部のキーワードに見られたように、研究テーマの決定には指導教員の指導やそれまでの授業で学んだ内容なども影響してくると思われる。しかしながら、今回の分析では在籍教員の入れ替わりやカリキュラム内容の変更などを踏まえた分析は行わなかった。ただし、心理学科ではどの指導教員であっても、学生それぞれの興味関心に沿った研究が行えるよう研究指導を行っているため、指導教員による影響は全体の傾向を大きく変えるほどではなく、学生の興味関心の変遷による影響の方が大きいと考えられる。

最後に最も大きな点として、社会に目を向ける重要性を指摘しておきながら、研究テーマの変遷に関する社会の変化の影響に関して分析を行えていないことが挙げられる¹¹。今回は探索的な研究であったものの、今後は電子データ化されていない初期の卒論題目も加えた上で、カリキュラムや教員の変遷、社会情勢の影響など外的な要因についても考慮に入れながら分析を行っていく予定である。

引用文献

- 樋口 耕一 (2020). 社会調査のための計量テキスト分析 [第2版]——内容分析の継承と発展を目指して——
ナカニシヤ出版
- 樋口 耕一・中村 康則・周 景龍 (2022). 動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング——フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析—— ナカニシヤ出版
- 石黒 香苗 (2021). 現代青年における希望の心理学 青年心理学研究, 32, 121-126.
- 片桐 雅隆・樫村 愛子 (2011). 「心理学化」社会における社会と心理学／精神分析 社会学評論, 61, 366-385.
- 丸野 由希 (2016). 卒業論文のテーマに何が選ばれてきたか——現代社会学部の卒業論文題目の語彙分析から—— 京都女子大学現代社会研究, 19, 35-50.
- 村本 由紀子 (2006). 心と社会を研究する方法 吉田寿夫 (編) 心理学の新しいかたち 3 心理学研究法の新しいかたち (pp. 221-243) 誠信書房
- 緒賀 正浩・桑原 和也 (2017). 明星大学における教育系学生の卒業論文テーマの変遷——明星大学教育学研究紀要を用いて—— 明星大学明星教育センター研究紀要, 7, 45-48.
- 岡崎 敦・坂本 隼人・平田 哲也 (2022). 九州大学における西洋史学教育——文学部西洋史学研究室卒業論文題目の分析から—— 史淵, 159, 85-117.
- 小塩 真司・脇田 貴文・岡田 涼・並川 努・茂垣 まどか (2016). 日本における自尊感情の時間横断的メタ分析——得られた知見とそこから示唆されること—— 発達心理学研究, 27, 299-311.
- 斎藤 環 (2009). 心理学化する社会——癒したいのは「トラウマ」か「脳」か 河出書房新社
- 佐藤 雄基 (2021). 卒業論文題目からみた近代歴史学の歩み——東京帝国大学国史学科 1905-1944 の事例報告—— 立教大学日本学研究所年報, 20, 36-55.
- 高木 修・田中 優・小城 英子・太田 仁・阿部 晋吾・牛田 好美 (2011). 学部学生の興味・関心から見た対人社会心理学研究の変遷——卒業研究のテーマ分析—— 関西大学社会学部紀要, 42, 131-153.
- 都筑 学 (2006). 心理学論文の書き方——おいしい論文のレシピ 有斐閣

注

- 1 https://univ.swu.ac.jp/guide/education/f_policy/#f
- 2 調査結果は2023年3月発行の本学生活心理研究所発行の『昭和女子大学生活心理研究所紀要』Vol. 25に掲載予定。
- 3 5つのクラスターから興味関心のある2つのクラスターを選び、学びを深める制度。
- 4 例として、女子大学生における～、現代女性の～など。
- 5 本研究は2022年度学内プロジェクト研究「心理専門職への社会的ニーズに応じたキャリア支援のあり方に関する包括的検討」(生活心理研究所)の助成を受けて行われている。
- 6 <https://kncoder.net/> よりダウンロード可能。
- 7 自己「関連」づけ効果などテクニカルタームとして用いられている例がないことを確認し除外した。
- 8 円の丸が大きいほどその語の出現頻度が多いことを意味する。また、円や円同士の線の色が濃く黒に近づけば近づくほど、より最近の卒論題目で選ばれやすい語であることを意味する。反対に、色が薄く白に近づけば近づくほど、より以前の卒論題目で選ばれやすい語であることを意味する。円と円の間の数値はJaccard係数を表す。概ね0.1前後を超える繋がりのみ可視化されている。
- 9 1980年から2013年における国内学術誌7誌の論文を対象に、測定値の時代的变化を分析する時間横断的メタ分析(cross-temporal meta-analysis)という手法を用いて検討されており、調査年が新しくなるほど自尊感情の平均値が下降していることが明らかとなっている。
- 10 https://univ.swu.ac.jp/guide/education/f_policy/#f

- 11 例えば，社会において自己やアイデンティティなど個人の内面が主要な関心事となる「社会の心理学化」あるいは「心理（学）化する社会」と言われる社会現象（片桐・檜村，2011；斎藤，2009）とのつながりが考えられる。心理学に関わる教員や学生がこのような現象に応答していくためにも，前述した社会とのつながりを意識した関心を育てていくことが求められるであろう。

（いわやま たかゆき 心理学科）

（わたなべ ゆたか 心理学科）